

シモーヌ・ヴェイユの労働観：『工場日記』におけるデカルト批判

江藤，正顕
立徳管理學院

<https://doi.org/10.15017/16050>

出版情報：Comparatio. 10, pp.40-51, 2006-11-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

シモーヌ・ヴェイユの労働観

『工場日記』におけるデカルト批判

江藤正顕

序 地中海

シモーヌ・ヴェイユ（一九〇九—一九四三）の最晩年は、第二次世界大戦の真つ只中にあり、その中で、彼女は、地中海の歴史に関心を寄せていた。ヴェイユと南仏とのかかわりは、オート・ロワール県ル・ピュイ市の女子中学校の哲学教師として赴任したときから始まる。

ヴェイユは学生時代以来、ギリシア古典研究、叙事詩『イリアス』、ソポクレスの悲劇、プラトン、さらに、ラシーヌなどのフランス古典悲劇を研究していた。キリスト教の一派であったカタリ派、あるいはアルビジヨワ派の修道院が拠点としていた南仏に残る前ローマ的な文明の特質について、ヴェイユは、それがヨーロッパ近代とは大いに異なるものであることに注目している。（一）すなわち、それは非ヨーロッパ的な、エジプト、アラビア、ペルシアなどの古代文明へと連なるものであるという認識である。「一九三四年一二月から翌八月までの工場就労をとおして、ヴェイユはみずからかつてのローマ人が軽蔑をこめて額に刻印した最下級の奴隷とみなすようになっていたのである。」「一三世紀に南フランスのオック語文明を根こそぎにしたアルビジヨワ十字軍もそうだ。ローマ教皇とフランス国王の名のもとに強行された異端征伐は、ヴェイユにいわせればフランス史上最大の汚点である。」（富原眞弓『シモーヌ・ヴェイユ 力の寓喩』青土社、

二〇〇〇年一〇月三〇日、一七〇頁、一七九頁）このようなヴェイユの認識は、前期（二〇代前半）、中期（二〇代後半）のヴェイユとはどのようにつながるのか。あるいは、彼女の初期論文に見られる厳しいドイツ批判（ヒットラー批判、ドイツ共産党批判）や、ロシア批判（スターリン批判、トロツキー批判）、中期論文の「労働」から「神」という問題（デカルト再批判）とどのように関連しているのか。「賃金労働」と「奴隷」、このあたりにヴェイユ思想の核心はあると思われるが、しかしながら、この「従順なキリスト教徒」という、後退し、衰弱しきつたようなところになぜヴェイユは向かっていったのか？

一九三〇年代、ヴェイユは精力的にドイツの情況分析、全体主義批判、ソヴェエト批判、トロツキーとの論争を行っている。時代は、ヒットラーの台頭から独裁、開戦へと急展開する中、ヴェイユは、師アランのアナキズム思想を受け継ぎながらも、さらにラディカルに、教育活動から労働運動へと突入していく。そして、こうした中で彼女の思想も形成されていく。その起点ともなった彼女のデカルト研究（二）はその意味でも重要性を持っている。そこで、デカルト思想をその内部から批判した『工場日記』におけるデカルトの問題を取り上げることによって、ヴェイユの特異な労働観について再検討する。

一 デカルト研究

『工場日記』（*Journal d'usine, 1934-1935 in La Condition ouvrière*, Gallimard, 1961）を読むとき、大正期の紡績・織布女工たちの労働状態を記録した細井和喜蔵の『女工哀史』（一九二五年）を連想することは、決して奇妙ではない。『工場日記』は、当時の女性労働者の置かれた立

場を詳細に描いたルポルタージュでもあるからだ。それを読むだけで、特に熟練技術を持つわけではない「女工」たちがどのような境遇にさらされ、また、何を感じ、何を思っていたかが知られる。(三)ただ、両者が大きく異なるのは、『女工哀史』が男性の手になる女性工員の悲惨な境遇の歴史であるのに対し、『工場日記』の方は、女性が自ら工場の内部に分け入り、その実態を、単につぶさに観察したというだけでなく、自らの身体を通して、「労働」そのものを経験した記録・報告であるという点である。さらに、それが社会的問題、労働問題として提出されるのみならず、哲学的な問題として捉えられている点でも大きく異なる。『工場日記』やそれと同時期に書かれた断片には、デカルトに関する言及が見出せる。

手動機械。レバーが二つついていて、一方の安全レバーのために、もう一方のレバーを下にさげるのがじまになる。こんなものがいったい何の役に立つのか、わたしには理解できなかった。倉庫係がそれを説明してくれる。(たとえば、デカルトとタンタロス)。(『工場日記』田辺保訳、講談社学術文庫、昭和六一年九月一〇日、九〇頁)

研究すべきこと、機械の出力という概念について。／シャルチエから手紙。のこぎりとかんな。おそらく、機械に関しては、こういうものはまったく別なふうに……(同、一四三頁)

なお、この部分の訳注によれば、シャルチエことエミール・シャルチエ(一八六八—一九五一)は、筆名アランとして名高いフランスの哲学者のことであり、彼は「デカルト的な人間主義と自由な思想的立場に立ち、一切の専制的なものに反対した」とされる。そして、ヴェイユは、一九二五

年から二八年まで、アンリ四世校在学中、彼の指導を受け、アランもまたヴェイユを高く評価し、後年まで手紙を寄せつづけていたという。このシャルチエ(アラン)に対して、ヴェイユは次のようなコメントを記している。

機械的「メカニク—3字ルビ」な仕事についての一般的な考えかた、さまざまな運動の結合、たとえば、フライス削り、こういう例をいろいろと整理して並べ、そこから純粹な観念をあらわし出してくること……：「シャルチエは、機械論について、皮相な、初歩的な見かたしかない」。／労働と幾何学のあいだにある類似性……(同「断片」、一九九頁)

このように、アランのデカルト観(四)について述べ、それを厳しく批判している。ヴェイユはアランからそのアナキズムの側面を強く受け継いだ。それはデカルトの独立独歩の姿勢でもあるが、ヴェイユは、いずれの党派にも、宗派にも属さず、孤立した地点からこれらを弾劾し続けた。(五)しかし、デカルトの機械論的姿勢を究極へと推し進めた結果、デカルトとは反対に、賃労働、奴隷状態、無力感のなかで、機械の一部に成り果てようとする自身の姿に出会うのである。ヴェイユのアナキズムはここでさらに本源的な(権力論)として現れる。『イリアス』への関心が、ひたすら「力」と「魂」との齟齬、亀裂に向けられていたように、デカルト批判は、自らの労働経験を通し、その「記号」||「官僚体制」という体系に対しての悲鳴となって現れる。

一四—一八、軍需生産のために工具の転用。デカルト的方法(困難の

分割)。／些末事のために一日がついやされてしまった。そのおかげで「6字傍点」、本質的な組織の問題が提起された。(同「Rの工場(B氏)」、一八九頁)

デカルトはまだ、三段論法から十分の解放されていない。／『第三の種類の認識』について、もう一度じっくり考えてみることに——「からだ」が、それにふさわしい能力を身につければつける程……たましいは神を愛するようになる」ということを、定理としてまとめよう。 (同「断片」、一九九頁)

なお、『第三の種類の認識』については、訳注に「デカルトがあげた三つの神証明のうち、さいごのいわゆる「存在論的証明」のこと。『方法序説』、『省察』参照。」(一九九—二〇〇頁)とある。

数学の批判「2字傍点」は、どちらかといえば、やさしいことであろう。それは、まったく唯物論的な「5字傍点」見方においてなされなければならぬことであろう。媒介物「3字傍点」(記号)が、デカルト、ラグランジュ、ガロワ、そのほかの多くのすぐれた人々をあざむいた。デカルトは、『精神指導の規則「レグラエー2字ルビ」』の中で、記号の問題が「ばんだ切な問題であることを認めていた。記号の正確さや、的確さばかりではなく、取扱い易さとか、やさしさなどのような、表面的には二義的とみえる性質も認めていた。これらの性質は、ただ、程度の差だけしかふくんでいないように思われる。ところが実際は、まったくちがっていたのである。まさに他のところよりも、このところにおいてこそ、「量が質に変化する」。しかし、デカルトは中途にして立ちどまってしまった。かれの『幾

何学』は、もう少しで俗流数学者(もちろん第一級の、ではあるが)作品に墮そうとしている。記号を綿密に批判するだけなら、容易なことであり、また益がないわけでもない。しかし、明確な説明を与えようとするのは、それこそたいへんむづかしい仕事である。(同「断片」、二〇一頁)このようなデカルト批判に続いて、さらに、こう書き記されている。

「記号と官僚体制」。／明晰な思想の物質的な「4字傍点」条件を探求すること。／世間との接触のあらゆる場合に「7字傍点」よろこびを見出して行くのは、なんとまあ、やさしい(そして、むづかしい)ことなのだろうか……(同「断片」、二〇一—二〇二頁)

判断力の訓練のむづかしさは、どこにあるのだろうか。考察の対象が、本質的に普遍的なものであるというのに、事実上、個別的なものだけしか考察することができないという場合に。ギリシア人たちがこの難題をどんなふうに解決していたかは、知られていない。現代人は、多くのものに共通なものを表象する「16字傍点」記号を用いて、それを解決してきた。ところで、こういう解決は、よいものと言えない。わたしの解決は……／「デカルトも、『……規則「レグラエー2字ルビ」』と、『幾何学』とのあいだに、おそろしいずれ「2字傍点」を見出していたのにながらない。この『幾何学』を俗流数学者みたいな書きかたをしたという、ゆるしがたい罪は別にしても」。(同「断片」、二〇二頁)

少し引用が長くなったが、ここでヴェイユが繰り返し一貫して批判しているのは、「媒介物」としての「記号」であり、「記号」化することによってそれが「官僚体制」と結びつくという点である。そこでは、「記号」のも

つべき「正確さ」や「的確さ」や「取り扱い易さ」や「やさしさ」といったものが一切捨象されてしまい、ただひたすら「記号」化された数量を追うことに終始する事態が引き起こされる。ヴェイユは、デカルトがこのような中途半端なところで考察を終えてしまっていることに不満を示す。その口調は、デカルトの敷いた記号化路線の果ての工場で汲々と労働に追いつたてられた経験も手伝って、さらに糾弾の様相さえ呈している。『工場日記』の中に現れる、このような突如としたデカルトへの言及と批判は、ヴェイユのそれまでの思考活動の中心的主題に対する回答であり、この文献の核心部分でもある。ヴェイユのこうしたデカルト批判は、他の文書にも繰り返し現れて来る。

デカルトが力学や物理学はもとより数学においても犯した誤謬は、数が単一性「ユニター3字ルビ」によって構成されているように、量的なすべての関係性もまた直線運動によって構成されていると信じたことだ。そのため代数学が万事を解明する鍵とされた。事実はそうではない。その証拠になによりも方程式が解決不能となった。ところが、充分すぎるほどの反証を確認しているにもかかわらず、われわれは依然としてデカルト的精神に固執している。(『カイエ3』富原真弓訳、みすず書房、一九九五年九月一八日、一九八頁)

ヴェイユの思想の第一歩はこのような場所から踏み出されており、デカルト、すなわち、近代の規範そのものを疑うということが、その後も主要なテーマになっている。それはまた、「記号」に「明解な説明」を与えてこなかったデカルトをその点で批判し、これを乗り越えようとするヴェイユの意思の現れでもあった。

付言すると、ヴェイユの動機の背後には、母との葛藤や兄アンドレ・ヴェイユに対する劣等感、また、師アランに対する考え方の相違、抵抗意識があつたことをうかがわせるものが様々ある。そして、彼女が「もちろん第一級の」と断りながらも「俗流数学者」呼ばわりするところのもの、それがデカルト批判に結集しているのではないかと思われる。シモーヌ・ヴェイユの兄アンドレ・ヴェイユは自伝において、妹について、「妹の人生が妹自身の固有の法則に従って展開し、同様に終末を迎えた」ということを理解したのはかなり後になってからであると述べ、また、「妹の描いた軌道から見れば、私はほとんど遠くにいる傍観者でしかなかった」(『アンドレ・ヴェイユ自伝』「序」稲葉延子訳)とも述べている。

二 神学上の問題

ヴェイユの神学、それはとりもなおさず、非教会的キリスト教だと言ってよい。ヴェイユはT・S・エリオットのように教会に所属することがなかった。(六)

その形而上学的性格をもつて、ヴェイユは一種の神学としての『工場日記』を書いたと考えられる。そして、そこでは、革命の否定、指導者の否定、政治の否定が行われる。奴隷状態を受け容れるということは、いったい何を意味するのか？ キリスト教を奴隷の宗教と観じたことについては、ニーチェと同様であっても、その「奴隷」という観念はまったく正反対のものとして捉えられている。ヴェイユを、今、改めて、近代以来、二〇世紀前半において極まった帝国主義戦争、世界植民地争奪戦争という歴史の中で捉えるならば、彼女の奴隷意志というべきものは、一国内における被抑圧者のみならず、世界の被抑圧者への連帯意識(あるいは、罪責意識も

含めて)の表明でもあつただろう。(七)

それがある限り、ヴェイユは決して異文明、異文化に対し、特別な「キリスト教徒」であることは出来なかつたのであり、また、特別な「社会主義者」「共産主義者」でもありえなかつた。(八)

では、ヴェイユにおいて、無名性とは何か？ それは、言い換えれば、奴隷性ということに他ならない。一般性、大衆性、マス化された世界において、徹底的に、その(マス)に成り果てること、成り下がること。最下層へ辿り着くこと、不幸になること。共に居ること、共に歩むものであること。こうしたヴェイユの不健康さは、ヴェイユ思想の不健康さでもある。だが、それは、イエスのそれでもあつた。他方、ニーチェが断罪したところの、また、アンドレ・ジイドが断罪したところのものでもある。ここに至つてヴェイユは、自らを窮地に追い詰めようとする点だけを見ると、『狭き門』に出てくるアリサにどこか似てくる。

ヴェイユは、一九三七年初め、モロッコ、チュニジアの北アフリカの植民地問題について発言し、同一九三七年夏にはイタリアへの旅を行っている。「メディチ家の礼拝堂で、ミケランジェロの彫刻を眺めながら、政治体制と芸術想像力の関係について考えたり、ダヴィンチの『最後の晩餐』の前で何時間も瞑想にふけつたりした」(田辺保『シモーヌ・ヴェイユ』講談社現代新書、昭和四三年十月一六日、一三六頁)との記述を読むと、ヴェイユがどうして「奴隷」という観念を発想したか、その一端が見えてくる。ヴェイユとミケランジェロとの関連については、他の文献にもこれ以上の言及は見出だせない。しかしながら、ヴェイユの(奴隷)という観点には、ミケランジェロの彫刻、絵画からもたらされた衝撃、あるいは共感があつたのではないか？ 反対に、ミケランジェロの筋骨隆々たる人体の造形も、それは決して、いわゆるマッチョなものとしてあるのではなく、奴隷の重

労働の結果によるものとして表されているのではないか？ それは見かけ以上に、思ひのほか、疲労している。ダヴィデ、モーゼ、予言者たち、イエスなど、奴隷とはかけ離れた存在すべしその延長上にある。すなわち、ヴェイユがいう、キリスト教とは奴隷の宗教である、という観点である。

田辺によると、同年、ヴェイユはインドの聖典に触れている。(九)

この頃のヴェイユの足取を箇条書き的に辿つてみる。一九三九年、一九四〇年とアルジェリアへの赴任を文部省に希望。返事は得られず。一九四〇年三月パリ陥落。ヴェイユ、ヴィシーへ。『救われたヴェネチア』執筆開始。主人公ジャフィエの造形の問題。一九四〇年一〇月 ヴィシーからマルセイユへ移る。(一〇)そして、ヴェイユの中では、地中海の古代文明と非西洋世界がはつきりと結び付けられる。ル・ピュイ、マルセイユ、サン・マルセル、カルカソンヌ、と南フランスを交遊し、ティボン、ペラン神父、ジョー・ブスケらに出会う。(一一)一九四二年五月アメリカへ出発。一九四〇年には、ベンヤミンもまたパリからマルセイユへ移り、そこからスペインへの途上、自殺している。五月頃、ルールドへ、八月頃にマルセイユへ移る。九月二六日にポル・ボウに着く。翌九月二七日死亡。ベンヤミンとシモーヌ・ヴェイユは、一九四〇年九月、一〇月に相次いでマルセイユへ移動している。

三 「奴隷」論

ギリシア・ローマ時代の「奴隷」、聖書における「奴隷」、南北戦争当時の「奴隷」、(一二)このようにさまざまな時代を通して存在する「奴隷」を、そして、現代においても別のかたちで存在する「奴隷」をヴェイユはどう捉えているのか。「奴隷」のもっとも端的な現れでもあるところの労働、そ

してそれによる肉体的精神的疲労に対して、ヴェイユはどう向き合っているのか。『工場日記』より、主に肉体的（疲労）(fatigue, fatigante 等)に關する記述をいくつか拾い集めてみる。

いそぐことなく、したがって疲れることもなくやる。(二二頁)

やり直しの仕事は、つらくて「4字傍点」危険だ。(二三頁)

へとへとになるまで、危険な仕事をやらせた。(同頁)

べつに全速力でやったわけではないのに、たいへん疲れた。(二四頁)

それでいて、女工たちはみな、せいぜい二フランそこそこを、かせぎだすために、注文分が完了できなかつたりしたら、それこそうんと罵倒されることを承知の上で、くたくたになるまでやらされる仕事で、どんなにいやなものかをよくわきまえているのだ。(二五頁)

朝のうちずっと、圧平(2字傍点)——疲れる——仕損じる。(二八頁)

疲れて、胸がむかむかする。(同頁)

少しでも、のろのろしたり、仕損じをしたら、怒鳴りつけられることはわかりきっているので、むりをして緊張し、へとへとに疲れなければならぬ。(二九頁)

休みの終わりになって、ふたたび仕事にからねばならぬけれども、

まだ、かぜを引いたままで、その上、疲れきっている。(三二頁)

最初の夜、五時頃、やけどの苦痛と、疲労と頭痛とで、わたしはまるで自分のからだの動きをどうにもおさえきれなくなつた。(三三頁)

まる一日、そして前日も、立ったままですごしたので、へとへとである。(三八頁)

しかし、やがて疲れが出て、速度が鈍る。(四八頁)

へとへとに疲れた。(四九頁)

五時四五分、機械を止めたとき、心は真暗で、希望もなく、そのうえ、ぐたぐたに疲れて精も根もつきはてた状態だつた。(同頁)

しかし、たまたま歌の好きなかまど係の少年にぶつかり、少年がにっこり笑い顔を見せてくれたり——倉庫係に出あつたり、——着がえ部屋で、いつもよりもっと陽気な冗談が交わされるのを聞いたり、もうそれだけでわたしにはよかつた、——こういうほんのちよつとしたあたたかい友情があれば、わたしの心はよろこびに溢れ、しばらくの間は疲れも感じずにすむのだ。(同頁)ひどい疲れのために、わたしがなぜこうして工場の中に身をおいているのかという本当の理由をつい忘れてしまうことがある。(五一頁)

もう精も根も尽きているのだから。(五四頁)

しかも、仕事をして疲れない。(五五頁)

毎日、こんなふうには神経のいら立ちも少なく、疲れもなかつたら、工場にいてもそんなに不幸ではないだろう。(五六頁)

正午に、非常な疲労感におそわれ、家へ帰る。(同頁)

しかし、いったん仕事をふたたびやりだすと、疲労は消えて、むしろ快適な気分にかわる。退社のときにも、疲れは感じない。(同頁)

しかも、同時に体の力が全部抜けてしまったような感じ。(五九頁)

次に、(奴隷) (esclavage, servile 等) や (屈辱) (humiliant 等) などの精神的苦痛に關する記述を取り出してみる。

けれど、これは屈辱的なことである。(二七頁)

二四時間、自由な存在であつた(日曜日)のに、また奴隷的な条件に屈従しなくてはならないという感じ。(二八頁)

……しかも、自分は両親の家で食客になつていふと思つと、いつそう嫌悪感がつのる——奴隷の感情——。(二九頁)

自由で友愛にみちた雰囲気で、卑屈な、さもしいものももうまったく見られない。(二六頁)

——もう少しのところ、わたしは、労働者のたましいの救いは、何よりも第一に、体力にかかつていると結論したくなる。たくましくない人たちが、なんらかの絶望的な状態におちこまずにすませるとは、とても思えない。(五二頁)

いずれも『工場日記』の初め五十頁ほどで、後は省略するが、このような記述は以後も延々と続くことになる。さらに、それに加えて、〈頭痛〉〈痛み〉といった記述も目立つてくる。この『日記』によると、彼女はルノー工場やシトロエン工場、アルストム電気工場などの機械工場において、プレス、きりもみ、リベット締め、製缶、導線端子、フライス盤の作業などを行ったことが記され、そこには、時間や個数や金額の無機的な数字の羅列の間に混じつて、右に挙げたような記述が現れる。このように読み進めてくると、ここで、再び、ヴェイユとミケランジェロとの関わりが、「奴隷」という言葉を介して改めて認識されるようである。それは、かつてポルトガルの小さな漁村で耳にした古い民謡から受けた衝撃とも同質のものであった。

音楽(さらには建築学?)の主題「2字傍点」と固定観念「4字傍点」との関係。バッハのフーガは克服された固定観念である。——だから最初の主題はそれほど重要性を持たない。固定観念は人間の唯一の苦しみ

である(歯痛はひとつの固定観念である)。固定観念とならない苦痛は苦痛ではない。(『カイエ』山崎庸一郎・原田佳彦訳、一九九八年一月二〇日、九二頁)

厳然たる生の存在要件が、いかにしてもこの「奴隷」性から免れ得ないという認識は、ヴェイユの肉体を通じ、その精神を震撼せしめた。ヴェイユは、デカルトからも、アランからも、トロツキーからも、さらに遠ざかつていく。そうして、彼女は彼女の生の条件そのままで切り崩そうとしていく。遅しい生から痛ましい生へ、否、遅しく痛ましい生へと。筋肉の疲労と精神の屈辱はもはやデカルトのようには分けられず、一体のものとなる(なつてしまふ)。(二三)彼女は、労働者を思い、労働者になる。植民地を思い、被植民者となる。賃金労働が、徹底的に、肉体のみならず精神の「奴隷」をも要求するとき、ヴェイユは、その状況に堪え得る者など誰もいないと考える。

人間の悲惨の認識は富者や権力者にはむずかしい。ほとんど抗いようもなく、自己をなにかの存在であると思ひこんでしまふからだ。この認識は、みじめな境遇にある人びとにとつてもむずかしい。ほとんど抗いようもなく、富者や権力者をなにかの存在であると思ひこんでしまふからだ。〔C2〕(同、一四四頁)

犯罪者や娼婦にとつて時間は細切れである。奴隷もそうだ。時間の細分化は不幸の一特性である。〔C2〕(同、一四二頁)

それは、まだ堪え得ると考えることが「出来る」のであり、堪え得るだ

けの力が「残っている」からなのである。(二四)これは、恐らく、敗北宣言にも等しい認識の仕方ではないかと思われるが、ヴェイユに言わせれば、そう考える以外に、「賃金労働」(無賃労働ではなく)の本質に迫る途はない、ということなのである。ヴェイユほど、労働条件を、その外部からでなく、また、内部からだけでもなく、肉体の言葉で捉えようとした者はいない。それゆえ、このジレンマは、彼女を崩壊せしめずには措かなかつた。それ以外に途はなく、それを行けば必ず滅びるという途をヴェイユは選び取った。ヴェイユは安易に共感することも共鳴することも、共苦することすら拒んでいるように思われる。それはまた、彼女が運命の「必然」によって「選び取られた」途であつたかもしれない。(二五)世界はヴェイユが直面しなければならなかつた途、すなわち、強固な生の「奴隷」性から、今も目をそらし続けている。決して「教会」の敷居を跨がなかつたヴェイユは、同様に、「労働」の敷居を跨ぎ越すこともなかつた。それは、彼女が、最後まで、哲学者にも、教育者にも、革命家にも、宗教家にもならなかつたことを意味している。

【注】

(一) 南仏の独特の風土は、以下のような諸記述によつても知られる。「かつて教会の懲罰は、地方司祭の手で行われ、最も重い刑でも破門であつて、悪魔の手下とされても、死刑が宣告されることはなかつた。ところが、二世紀から一三世紀の転換期に西ヨーロッパを襲つた最大の反教会勢力、カタリ派の出現は、教会側の対応をすっかり変えてしまった。」(上田安敏『魔女とキリスト教』 講談社学術文庫、一九九八年一月一〇日、一七三—一七四頁)「サバトという言葉に、魔女の集会というイメージが固着し

た地は南フランスであつた。この地方には、ユダヤのカバラの秘学とスペインのイスラムフリーメーソンの魔術という伝統的潮流が入つていた。こうして全ヨーロッパにサバト信仰がピュラーなものになつていった。」(同、一四八頁)「類比的・流出的三元論によつて真の創造神である新約神と邪神・悪神としての旧約神を区別する思想は、マニ教、ビザンチン帝国の異端ポゴミル派、そして中世ヨーロッパ最大の異端カタリ派にまで継承され、現代ではキリスト教回心後のシモーヌ・ヴェイユによつて深化、展開されることになつた。」(笠井潔『テロルの現象学』ちくま学芸文庫、一九九三年七月七日、二六六頁)

(二) ヴェイユはデカルトの「幾何学的推論」を評価し、「代数学的抽象」を批判している。「やがて一九三〇年に提出した高等師範学校の卒業論文『デカルトにおける科学と知覚』では、『方法叙説』の幾何学的推論を捨てて『精神指導の規則』の代数学的抽象に拠つたとデカルトを批判し、彼の「方向転換」に端を発する近代科学が労働の場における労働者の疎外を生んだと断罪する。労働のうちに思考と行動のもつとも純粹で高度な綜合——自由の実現の可能性——を認めていた以上、その後ほぼ一〇年にわたり、労働をめぐる自由と抑圧の問題に沈潜していくのは当然の帰結であつた。」

(富原眞弓『シモーヌ・ヴェイユ 力の寓喩』(青土社、二〇〇〇年一月三〇日、五二頁、以下『力の寓喩』とする。)

(三) 「未熟練女工のヴェイユが旋盤を回していた一九三四年—三五年は、フランス労働界の暗黒時代に当たっていたのである。」(富原、『力の寓喩』同前、六六頁)「世界的な同時性として、一九三〇年前後の時代は労働者たちにとつても、普遍的な状況にさらされていたといえる。それは世界大恐慌が起こつた時でもある。」

(四) 「彼『デカルト』はくりかえす、どんな物にも部分と運動があるだけだ、

すべては部分と運動との上に展開されていて、拾いあげた神秘もなければ、希望とか傾向とか、力とかよばばよびたいような思想の胚芽もない。すべての運動はただ機械的なものであり、すべての物体はただ幾何学的なものである。」(アラン『精神と情熱に関する八十一章』小林秀雄訳、創元ライブラリ、一九九七年四月二五日、九〇頁) ヴェイユはアランのデカルト解釈の影響を受けながら、さらに、その機械論的な物質観を変えていく。アランがここで述べているような言葉、すなわち、「神秘」「希望」「傾向」「力」といったものが、後のヴェイユでは重要さを増していくことになるが、一方、「幾何学的」という言葉などは、アランとヴェイユではすでに評価が微妙に異なっているように思われる。

(五) ヴェイユはアランのデカルト解釈をまずは、その身をもって内側から検証しようと試みた。それが女工体験であった。『工場日記』は、自らを語ることにない女工が初めて語った証言でもあった。しかし、それはヴェイユの肉体も精神も深く傷つけることにもなった。「しかし工場と戦場の経験は、人間の生存の第一要件が自由でなく抑圧であることを教えた。そしてヴェイユは、社会的失墜と心理的な屈辱にこそ抑圧の本質があることを知る。／アランの哲学にみられる理性や意志への信頼は、悪夢のような軍需産業にさらされる以前の、つまり一九二〇年代の楽観主義を色こく反映していた。しかし社会人となったヴェイユが生きた三〇年代は、もはや一世代まえの間尺に合わなくなっていた。戦争の脅威が重くのしかかる後半生はもっぱら不幸の考察にいちゃされ、主たる関心は抑圧と自由の葛藤から、不幸と注意、根こぎと憐れみの関係性へと移る。亡命時代のヴェイユは、労働組合にせよ、左翼運動にせよ、カトリック教会にせよ、なんらかの信条や教義をかかげる集団への警戒をいよいよ強めていく。その一方で、言語や宗教や歴史を分かちあう人間的環境「ミリュール—2字ルビ」には、

いままでになく肯定的な役割を託すようになる。人間的であつても人為的でないゆたかな空間に複数の根をおろしている人間だけが、真に能動的な待機の姿勢をとれると考えたのだ。ヴェイユ自身が過去にも未来にも根をもたない亡命者となり、母国もまたナチスの覇権のもとに存亡の危機にさらされていたからこそ、自然なかたちで根づくことの重要性を痛感したのであろう。」(富原眞弓『シモーヌ・ヴェイユ』岩波書店、二〇〇二年一月一八日、二九一—二九二頁) ただ、このような「危機」は、すでに二十年代の第一次世界大戦において、戦争に駆り出された多くの青年たちが経験したことではなかったか。レマルクの『西部戦線異状なし』(秦豊吉訳、新潮文庫、昭和三十年九月二十五日、一三五頁)にも、「ああ、この茶色の地面はどうだ。めちやめちやに引き裂かれ、張り裂けている。この茶色の地面は、太陽の光の下に、脂びかりにかすかに輝き、休む間もない鈍感な自動人形の世界の背景になっている。僕らの喘ぎは、自動人形の弾機の鳴る音である」という記述を含むその前後の箇所、また、「国民が互いに向き合われ、逐い立てられ、何事も言わず、何事も知らず、愚鈍で、従順で、罪なくして殺し合うのを、僕は見てきた。この世の中のもつとも利口な頭が、武器と言葉とを発見して、戦争というものを、いよいよ長く継続させようとするのを、僕は見てきた」という箇所に、ヴェイユが真底恐れていた情況は描かれている。さらに、第二次世界大戦において、「人間」が「兵器」にされる情況は、その極点まで達した。保阪正康は「特攻」についてこう述べている。「人間を兵器と見たてて、そして自分たち(これはこの作戦を主導した指導部を指しているわけだが)があたかも人間であることを装った瞬間に、この戦争は「人間」の側が兵器に、「兵器」の側が人間にという二つの枠組で構成される仕組みをつくりあげたことにならぬのではないかと思われる。」(保阪正康『特攻』と日本人』(講談社現代

新書、二〇〇五年七月二日、二〇〇頁)

年七月一日、三二三頁)

(六) ヴェイユの注意深さ、警戒心の強さは、人間の精神、内面に関わる「宗教」に対しても容赦なく発揮される。「ヴェイユの友人シューマン宛の書簡には、受洗を拒む理由が五項目あげられている。一 自分はキリスト教の主要な教義、秘跡を信じてはいるが、歴史観が異なる。二 旧約聖書にあらわれたイスラエル人よりも、むしろ異教徒のほうがすぐれていると思う。三 キリスト出現以前にも、世界の諸宗教、諸哲学を通してロゴスがあらわれたと考える。四 イスラエル人に残虐行為をさせたのは神である、と考えるのは大きなあやまりだと思う。五 真の神の認識は、キリスト教国よりも古代や異教国家に伝えられたものの中にみられる。」(神谷美恵子「シモーヌ・ヴェイユの軌跡」『本、そして人』みすず書房、二〇〇五年七月七日、一七七頁)

(七) ヴェイユの「デカルト批判」から発したこのような観点は、いかにその対象が異なっても、常に貫かれている。短い生涯の中で、哲学、数学、言語、教育、宗教、労働、革命、戦争とさまざまなことに関わったヴェイユが残した次のような言葉は、逆に、それらが緊密なつながりと一貫した姿勢をもって認識されていたことを示すものだろう。「幾何学や算数の問題には解答を出さなければならぬ。それにはその問題をじっと注視するだけで十分である。ラテン語やギリシア語あるいはサンスクリット語のテキストは翻訳されなければならない。それにもじっと注視するだけで十分である。同様に、悲惨さは、もしそれが超自然的な愛をともし注意力をもって、恩寵に助けられつつ、見つめられるならば、きつと変容されるはずである。それにはただ時間だけが必要なのである……。罪が滌れ尽きてしまった者……」(『ギーター』／(この類似「アナロジー」2字ルビ)を教育にも応用できないか。『カイエ2』田辺保・川口光治訳、一九九三

(八) 『甦るヴェイユ』を書いた吉本隆明は、自身の、「国家」に対するものとしての「一般大衆」の理念の原型を、このヴェイユに求めている。「理念的に言えば、戦争や軍隊そのものが、本音を本当に言っちゃえば自分の国民、大衆に対する弾圧の道具以外の何物でもないんだ、と思うんです。シモーヌ・ヴェイユが第二次大戦前にそんなことを言ってたんですけど、ぼくはそれに賛成する部分が大いんですよ。」(吉本隆明『「反核」異論』深夜叢書社、一九八九年五月二〇日、二四四頁)

(九) 「一九三九年の終わりには、ヒンドゥー教の経典である『バガヴァッド・ギーター』を読み、ここには一篇の美しい詩に対して感じる愛着とはまったく次元のちがった一つの真理への同意が要求されることをさとしたのであった。また、ホメロスの『イリアス』が、まったくキリスト教的な光にひたされていることを知り、ディオニソスやオシリスは、ある程度までキリストを指示していると感じたりした。彼女はのちに、こういうヒンドゥー教やギリシア思想の中にも、ひとしく唯一の真理の投影を見てとり、人間と超自然性をつなぐ一種の「架け橋」とみなすようになったが、その端緒はここにある。」(田辺、前掲書、一四七頁)ヴェイユがインドの聖典に関心を持った要因としては、一方では、兄の存在も無視できない。彼は数学研究のためにインドに留学した際に、サンスクリット語を習得している。「なお、シモーヌが神秘主義的な詩人ルネ・ドーマルとその妻ヴェラと知りあい、かれらからインド哲学やサンスクリットを学んだのは、あるいはアルデシュへ出発するよりも前だったのだろうか。彼女はおどろくほどはやく『バガヴァッド・ギーター』を原文で読み、翻訳できるようになった。ヒンドゥー教の伝承の中にも、彼女はキリスト教の教えに通ずる真理性を見出だそうとしていた(彼女の『ノート』には、禅についての言

及も見られる)。ドーマル夫妻にあてた彼女の手紙も、深い友愛にみち、インドの英知へのすぐれた理解を示している。クリシユナは、メルキゼデクヤオシリスやディオニユスと同様に彼女には近しい存在であった。」

(田辺、同、一六九—一七〇頁)

(二〇) やむを得ずマルセイユに移ったことで、ヴェイユは南仏の文明をより深く実感するようになる。「武装したヨーロッパが、この豊饒な文明の地を破壊するまでは、地中海地方は東洋と西洋をつなぐ場所であり、カタリ派は、プラトン思想や古代秘教の伝統を正しくうけつぎ、開花させてきたのであった。いわば、人間が超自然とふれあつていたところ、超自然との正しい関係の中で、真に人間的な「架け橋」を求めていた場所がそのまま現実化されていたのであった。」(田辺、前掲書、一六一頁)「マルセイユでのシモーヌ・ヴェイユが住んでいたカタラン街のアパートからは、青い地中海の広がりが見わたせたという。この海をながめながら、彼女は東洋が西欧と出あい、ギリシアがキリスト教の中に光をそそぎこむ地中海文明の歴史をどんなにはるかな思いをもって、胸をおののかせながら冥想したことだろうか。」(田辺、同、一六二頁)さらに、そこにはアフリカ人やアジア人も多くいて、彼等の世界への入り口にもなっていた。「シモーヌ・ヴェイユはもともと、植民地の被圧迫民族に対して深く共感し、その人々の立場に立った行動をしてきた。一九三八年には、アルジェリア人メサリ・ハジの処刑反対の運動に加わったこともある。ほかにする仕事もなかったので、ヴェトナムの労働者たちは、その冬、マルセイユ：「以下略」(田辺、同、一六三頁)

(二一) 南仏に色濃く残る神秘主義的傾向について中沢新一はこう指摘する。「この球体のアレゴリーの謎を解く鍵は3という数字にほかならない、とシモーヌ・ヴェイユは書いている。もつとはつきり言つと、三角形と円と

の関係が、自然と神との結びつきを神秘的なやりかたで説明している、と彼女は語るのだ。」(中沢新一『バルセロナ、秘数3』 中公文庫、一九九二年一月一〇日、一六七頁)

(二二) アフリカ大陸からアメリカに運ばれた「奴隷」もむろん無関係ではない。「(高銀) その海の向こうにアフリカ大陸があります。人類の葬祥地であり近世以来の最も苦しい人類の現実として残されたところです。アフリカの悲劇は早くからフランツ・ファノンの熾烈な理論によつて一層生々しくなつたところがあり、またそれは植民地の宗主国の言語が土着民の部族語という母国語をいかに殺すかについての証言でもあります。」(高銀・吉増剛造『アジア』の渚で——日韓詩人の対話(藤原書店、二〇〇五年五月三〇日、一七五頁)「(高銀) アフリカの野性こそ、地球上に残つたざりざりの最後の真実と信じます。その自然の中には、まだ人類の根源と人類の究極が分けられないままの太古性が隠れていると思います。その太古は過去や未来などの時間ではありません。」(同、一七九頁)

(二三) 時代が変わつた現代において、労働の情況も変化した。克服された問題もある一方で、より深刻化した問題もある。それはヴェイユの論じたデカルトの問題がさらに恒常化し、先鋭化してきたということでもある。「工業化社会に移行する過程で、時間の観念の厳格化など、労働者は精神と身体を生産性向上の歯車に組み込まれていきます。日本の場合には、共同体の秩序意識が会社へ持ち込まれて協調性が強要されていく。しかも企業間の生き残り競争だけでなく、会社の中での労働者同士の生き残り競争も熾烈なわけです。一定期間休息し疲れを取つて、再び産業戦士として現場に復活するために、休日が労働者には与えられる。」(目取間俊『沖繩「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会、二〇〇五年七月一〇日、一五九頁)「時間の観念の厳格化」とは、まさにヴェイユが批判した「代数学的抽象」に他な

らない。

(一四)「力」というものに対するヴェイユの考え方は、以下のようなかたちで示されている。「オック語地方、ギリシア、力を讚美しない文明。現世的なものは架け橋だったのだ。かれらは魂の状態のうちに強烈さを求めたりせず、情感の純粹さを愛する。／力の影響をまぬかれているものは純粹である。／かれらにとつて愛は純粹な願望であつた。征服欲ではない。人間が神にいだく愛もそうである。[C3]」(『ヴェイユの言葉』富原眞弓訳、みず書房、二〇〇三年一月二五日、二八〇頁)「オック語文明の靈感はギリシアの靈感と本質を一にする。その本質とは力の認識にある。その認識は超自然的な勇氣にのみ属する。超自然的な勇氣はわたしたちが勇氣と呼ぶものすべてを包括し、さらにはるか無限に貴重なものをも包括する。しかし腰抜けは超自然的な勇氣を魂の弱さと勘ちがいをする。力が地上における唯一といつてよい至高の存在であると認めつつも、嫌悪と輕蔑をこめて力を拒絶することである。この輕蔑のもう一方の面は、力の痛撃にさらされている万物への憐れみ「コンパッション—3字ルビ」にほかならない。[EHP]」(富原、同、二七八頁)

(一五)ここにおいて、ヴェイユの中で、「自由」と「必然」との関係は逆転せしめられる。富原は、それをデカルトとスピノザの対比で捉えている。「しかし工場就労、スペイン内戦、パリ落城、失職、家族離散、亡命などの試練をつうじて、人間に与えられた自然な分け前とは、コギトにもとづくデカルト的な自由ではなく、スピノザ的な必然への服従であつたことを理解したのだ。真空にむけられた祈りにも似た注意力こそが、眞理にふさわしい人間の能力であることを。」(富原眞弓「逸脱する「女」、またはアンティゴネー」『現代思想』青土社、二〇〇五年九月一日、一七三頁)